

石川 朗・内山 靖・新田 収 編集

『臨床実習フィールドガイド』

奈良 勲

(広島大学大学院保健学研究科)

近年、わが国の高齢社会の到来に伴い、保健・医療・福祉に関連した社会保障制度の確立はますます重要な社会的課題となっている。そして、その制度の進展の一部を支える関連職種のマンパワーの確保は急務であり、関係者の努力が期待されている。これらの社会的課題に対応すべく、リハビリテーション業務に携わる理学療法士・作業療法士などの養成も積極的にすすめられている。しかし、それらの関連職種の養成課程において、臨床実習の占める質的量的比重は極めて大であるにもかかわらず、臨床実習施設の確保と学生の臨床実習および臨床実習指導の在り方については、種々の難題を呈しているのが実状である。

そのような実状に鑑みて、既に臨床実習に関する著書もいくらか出版されているが、このたび、南江堂から『臨床実習フィールドガイド』が出版されたことは喜ばしい。

本書は、1部(総論)と2部(各論)で構成されており、「上手なレジュメのつくりにかたと発表のしかた」が付記されている。総論では、臨床思考過程の基本的な流れを解説し、各論(第1章：神経系、第2章：運動器系、第3章：呼吸・循環・代謝系、第4章：発達障害、第5章：その他の疾患・病態)では、それに準じて代表的な疾患を診る臨床思考過程を具体的に解説している。

本書は、主に理学療法学を学ぶ学生を対象にして、理学療法士によって書かれている。しかし、学生の立場で患者さん(対象者)を診る過程が順序立てて段階的に記述されているため、理学療法士ではない学生にとっても、臨床思考過程を修学する上でたいへん有用であると思える。

本書の最大の特徴としては、臨床思考過程を順序立てて8段階(①処方箋をもらったら、②対象者に対面したら、③所見の取り方・進め方、④どう捉えるのか、⑤どうするのか、⑥どう関わるのか、⑦経過をみて、⑧症例を振り返って)に分類して解説していることである。また、各段階には、それぞれ「目標」「具体的な臨床思考過程」「確認」事項が記載されており、学生の注意を喚起している。さらに、随所に「アドバイス」「memo」が記載されており、学生の修学を補足する役目を演じている。

上記のごとく、本書は、主に理学療法学を学ぶ学生を対象としていることから、帯紙ではなくタイトルのどこかに「理学療法」という言葉を挿入すれば、読者には識別しやすいと思われる。また、本書のどこかに、本書が提示している8段階の臨床思考過程に準じて作成された学生の「症例報告書の実例」を記載し、それに対する教員もしくは臨床実習指導者の「具体的な添削・コメント」があれば、学生にとってはさらに有用であると思える。

●A5判 528頁

定価(本体 5,700円+税)

2004年 南江堂・刊